



Asile Flottant 2021.10 © Hiroshi Maeda



ポストバブル の建築家展

—かたちが語るとき—

アジール・フロタン復活プロジェクト

2022.1.12 → 2.19

BankART Station みなとみらい線
新高島駅 B1F

トークイベント

2022.1.16 / 2.19(予定)

併設カフェ / 先着30名 / 無料

京都市京セラ美術館

2022.3.23 → 4.2(予定)

アジール・フロタン復活展



BankART 1929



ポストバブルの建築家展 — かたちが語るとき —

アジール・フロタン復活プロジェクト

2022.1.12 → 2.19 @ BankART Station 入場料700円 11:00 - 19:00 会期中無休

2022.1.16 / 2.19(予定) トークイベント 併設カフェ/先着30名/無料

本展は、昨年フランスのFRACサントル＝ヴァル＝ロワール(オルレアン市)でおこなわれ、現在パリ日本文化会館(パリ市)で開かれている展覧会と同じコンセプト、同じ出展者によって、日本で並行して開催される(日本での出展作品は、若干数がフランスとは別のプロジェクトを出展している)。これらの展覧会の企画は、1929年にル・コルビュジエがリノベーションを行い、前川國男が担当したアジール・フロタン(浮かぶ難民避難船)に端を発している。そして、日本建築設計学会の支援により、水没の窮地にあったアジール・フロタンは2020年10月19日に奇蹟の浮上を遂げた。

出展者

竹口健太郎・山本麻子/蟻塚学/芦澤竜一/千葉学/工藤和美・堀場弘/
遠藤克彦/遠藤秀平/畑友洋/平田晃久/岩元真明・千種成頭/乾久美子/
岩瀬諒子/光嶋裕介/久保秀朗・都島有美/前田圭介/前田茂樹/みかんぐみ/
宮晶子/宮本佳明/百枝優/永山祐子/中村拓志/西沢立衛/
大西麻貴・百田有希/小原賢一・深川礼子/齋藤隆太郎/島田陽/
栗原健太郎・岩月美穂/菅原大輔/田根剛/手塚貴晴・手塚由比/宇野享/
山下保博/米澤隆/吉村真基

サントル＝ヴァル＝ロワール地域圏現代芸術振興基金

Frac Centre-Val de Loire

2020年10月16日(木)～2021年9月19日(日)

国際交流基金パリ日本文化会館

Maison de la culture du Japon à Paris

2021年11月23日(火)～2022年2月19日(土)

兵庫県立美術館ギャラリー棟3階

2021年12月2日(木)～2021年12月21日(火)

横浜 BankART Station

2022年1月12日(水)～2月19日(土)

プロデュース: 遠藤秀平(建築家・神戸大学名誉教授)
キュレーション: 五十嵐太郎(建築史家・東北大学教授)
空間デザイン: 竹口健太郎・山本麻子(アルファヴィル)
グラフィックデザイン: 藤脇慎吾(フジワキデザイン)
コーディネーション: 石坂美樹
協力: 神奈川大学曾我部昌史研究室
主催: 一般社団法人日本建築設計学会
共催: BankART 1929

Special Thanks: ル・コルビュジエ財団、
アンシエーション アジール・フロタン ADAN(AAFA)
公益財団法人国際文化会館、公益財団法人笹川日仏財団、公益財団法人河野文化財団、
公益財団法人忍研究所、一般財団法人ユニオン造形文化財団、
一般社団法人日本文化デザインフォーラム、アンスティチュ・フランス日本、
アーキテクツ・スタジオ・ジャパン株式会社、旭ビルウォール株式会社、株式会社新井組、
アルコニクス株式会社、株式会社アロイ、株式会社Echelle-1、株式会社栗山化成工業、
積水ハウス株式会社、中西金属工業株式会社、日鉄建材株式会社、
ルネサンス・フランスーズ日本代表部、パルククラブ、遠藤秀平建築研究所、
神戸大学遠藤秀平研究室、神戸大学光嶋裕介研究室、神戸芸術工科大学畑友洋研究室、
スターリン・エルメンデルフ&久美子、前田茂樹、辰巳明久、加藤道夫、山名善之、橋本功、
水野誠一、菱川勢一、マニュエル・タルディッツ、トーマス・ダニエル、石坂美樹、
藤脇慎吾、澤井亜美、竹口健太郎、古賀順子、飯田真実、藤井章弘、岸本郁(敬称略)

本展は、ル・コルビュジエ財団が保有する資料の提供を受けています
Archives de la Fondation Le Corbusier
アジール・フロタン復活プロジェクト ホームページ <http://www.asileflottant.net/>

展覧会趣旨

本展は、フランスを巡回した展覧会を再編したものであり、改めて日本の現代建築におけるかたちの可能性を問うことを目的とした。

日本では派手な造形が目立ったポストモダンの最盛期と空前の好景気が重なったために、1990年代の初頭にバブル経済が崩壊した後、強烈な形態が忌避され、むしろ周辺環境を読み込むデザインが注目された。さらに1995年の阪神・淡路大震災を受けて、脱構築主義のデザインは不謹慎なものともみなされ、2011年の東日本大震災が発生した後、かたちよりも、コミュニティの関係が重視されるようになった。

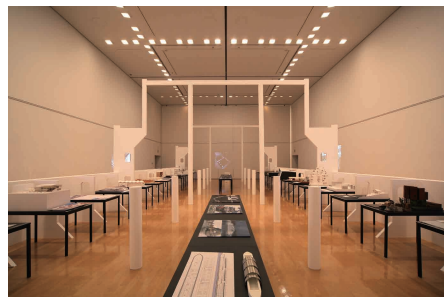
だが、そもそも両者は対立するものなのだろうか?

実際、独創的な形態をつくりながらも、ただ奇抜なオブジェをめざすわけではない、すぐれた建築は数多く存在する。コンテクストを読み込みながら、ときにはコミュニティにも関与していくかたちは成立するはずだ。今回の展覧会では、以上の主旨にもとづき選んだ建築家35組を紹介する。彼/彼女らはポストバブル期に活動を開始し、まだ30代の気鋭の若手を含む。

かたちは意図を内包した視覚言語である。もちろん、古典主義の建築も、要素の統辞論が言語になぞらえられ、ポストモダンの時代には、看板や過去の意匠が発するメッセージに注目し、言語の意味論のように建築を記号としてとらえる考え方が流行した。しかし、現代の日本人建築家は、かたちのデザインによって人々のふるまいをうながし、新しい関係性をもたらす。さらに周辺環境との応答も通じて、かたちは語るだろう。本展では、各建築家にかたちをどう考えるかについての文章も提示してもらった。

本展のもうひとつの狙いは、海外に発信される日本建築展の枠組をズラすことである。従来の展覧会は、東京の男性建築家による東京の作品ばかりだった。なるほど、戦後からバブル期の東京は、斬新なデザインの実験場だったが、現在は地方都市の状況がおもしろい。そこで本展は東京中心に陥ることなく、環境が異なる日本各地の建築家による様々な実践の紹介も目的としている。また昔は女性の建築家がめづらしい存在だったが、今は人数が増え、活躍もめざましい。本展は35組の建築家のうち、1/3以上に当たる13組に女性が入るのは、新しい傾向を反映したものだ。なお、日本ではフランスの展示と構成を変え、サイズとしてはおおむねS→M→Lという風に、ビルディングタイプとしては住宅から公共建築へ、という順番でプロジェクトを紹介している。

五十嵐太郎 建築史家、東北大学教授、本展キュレーター



「ポストバブルの建築家展」
2021年12月2日～21日
兵庫県立美術館ギャラリー棟3階
© ADAN photo: Kentaro Takeguchi



前川國男作画のバース。
前川が落書きしたと思われる
日本語があり、
「明けぬれば、憂しどころに、
暮れぬれば」と読める
(FLC12063)
© Fondation Le corbusier